

画廊では新年早々、数年来、温めてきた企画「Ins taller 1609」(金城満 展「Sweet 400」一月十七日〜三十一日)を予定している。

一六〇九年は周知の通り、独立国琉球に薩摩の軍勢が攻め入り、首里が落城した年である。以後、江戸時代二百六十年も琉球国は薩摩藩の従属支配下におかれ、植民地的構図の時代を歩むことになる。今年はその薩摩侵略支配から四百年の節目の年にあたる。小国の琉球国に薩摩が侵攻



## おきなわ美術コラム

## 視線

上原 誠勇

した理由には諸説あるようだが、文脈をなぞってみると、その構図は近現代史の沖縄像と重なって興味深い。

豊臣秀吉の朝鮮侵攻(一五九二―九八)の際、秀吉は薩摩藩を介して琉球国に支援を求めた。しかし琉球国はすべてに応えようとはせず、過半だけを負担し、これ以上の軍役負担は困難だと拒絶したとされる。以後、十数年を経て江戸初期に入り薩摩藩は「秀吉の朝鮮侵攻の支援を琉球国の肩代わりをした、その代価を払え」と要求。「それは不当だ」と応えなかった琉球国。それも根拠の一つにして、薩摩藩は琉球国侵略を正当化した。

一六〇九年、琉球国王は薩摩に二年間幽閉された後、薩

## 400年の時空に潜伏するモノ

摩に服従し、一六一一年には忠誠を尽くす内容の「起請文」という誓約書を書かされ、「掟十五条」なるものを突きつけられた。

しかし、この文脈も小生の浅学の拾い読みにすぎない。歴史の真実は専門家の研究成果に学ばなければならぬ。

ただ、そこから見えてくるのは、小国ながら対外交易で栄えていた琉球国を、幕府も薩摩ものどから手がでるほどほしかったということだろう。

以後、中国と冊封関係を保ちながら、薩摩、幕府の二重支配を受け入れ、独立国として偽装し、主体性を喪失した琉球国の姿がある。

近代の琉球処分以降の現在

も、私たちの日常に通底する「偽と」疑の主体の喪失が潜伏しているのではないか。

昨年、あるテレビ番組で「軍用地が返されて、どうですか？」インタビュアーに、地主と思われる七十歳半ばのオジイがこう答えていた。「わったーや明日からちゃんし生活すが」。お孫さんもいるであろう老人の言葉に耳を疑った。

四百年の長い歴史で沖縄という身体に寄生し続けている「モノ」、言葉にできないある種の麻薬のように「潜伏するモノ」。

美術で絡め取ることができないのか、二〇〇九年の節目年に、中堅と若手美術家が「モノ」の浮上を試みる。

(画廊沖縄代表)